



お坊さんに

なりました



まえだ すみよ
前田 純代

1973年生まれ。東京大学文学部卒。
野村総合研究所勤務。フランスHEC経営大学院MBA修了。
中央仏教学院卒。広島市・善法寺坊守。

1

寿退社

「そうか…お寺にお嫁に行くのか…」

上司はあっけにとられているようでした。東京丸の内にあるオフィスビルの一室で、当時の上司と私の間に気まずい空気が漂います。

「しかも、嫁ぎ先が広島となると、結婚後も勤め続けるわけにはいかないよね…」

社員が転職する場合、通常なら会社は引き留めるのでし

ようが、お寺というあまりに畑違いの分野のうえ結婚話ですから、阻むわけにもいかな

いとあったところでしょうか。「なにはともあれ、おめでとう、だよね」

ニッコリ笑って上司はそう言い、私はそのやさしさに「ありがとうございます」と言ったのか「すみません」と言ったのか、今となっては思

い出せないけれど、言い訳の言葉も見つからず、ただ恐縮するばかりでした。

それから退社までの2カ月

寺に嫁入りしました。当時私が知っていることといえ、大学以来10年近くおつきあいしてきた主人のひととなりと、結婚前に一度だけ訪れた、なぜかその日だけゆったりと時間が流れていた広島のお寺の空気、主人の両親のおだやかで優しい表情、それから「浄土真宗は親鸞聖人が念仏ひとつで救われると説いた教え」という中学生レベルの知識だけでした。

お経も知らない、教義も知らない、坊守という言葉すら知らない状態で、結婚と同時に

間は、お世話になった方々へのご挨拶、送別会、残務整理であったという間に過ぎていきました。

会社の同僚も友人も一緒に驚いていましたが、男性と女性で反応は微妙に異なりました。男性は、少なからず仏教に興味があるようで、私が仏門に入ることに「いいなあ」とちよつとوراやましそうな表情を見せます。「仏と菩薩はどう違うか知っているか」などと、うんちくを傾ける人もいて、仕事のかたわら仏教

に坊守、そしてお坊さんになることになったのです。

考えてみると、結婚や転職は、まったく異なる環境に飛び込むという点で、誰にとっても大きなリスクをとものなものです。その人生の転機に不安や恐れを感じるのは当然のことです。けれども、いったん新しい世界に飛び込んでみると、かつて感じていた不安や恐れが無用のものであったとわかるのです。むしろ、思いも寄らない出遇いと慶びが待っている、人生とは、そういうものかもしれません。

書を読んでいることがうかがえます。女性はどういうと、「なんで？」という不可解な表情と「よく決断したねえ」という驚きの表情が入り混じります。8年間のキャリアもMBA（経営学修士）の資格もまったく通用しそうにない異業種への転職であり、しかもどうやら「お寺の奥さんって大変そう」というイメージがあるようで、女性の反応は複雑でした。

こうして私は、8年間あたたかく見守り育ててくれた東京の会社を退職し、広島のお

結婚して